

温かい暗闇



神奈川県 全日本空輸株式会社

白澤 健志

第5回日本語大賞 一般の部 優秀賞 受賞作品

気がつくとは私は、深い暗闇の真ん中に立っていた。暗闇といっても、何かの比喩ではない。純粹に、文字通りの、真の暗闇だ。

その時私が立っていたのは、山深き夜の森でも、光届かぬ海の底でもない。東京都心の、ある建物の一室に特別に設けられた、完全遮光の空間である。

ほんとうの暗闇を体験できるイベントがある、と友人に教えられてやってきたこの空間に、だが、私はさほど期待を抱いていたわけではなかった。第一、暗闇にほんとうも嘘もないだろう。私は暗所恐怖症でも閉所恐怖症でもない。それどころか、写真が趣味だったせいで暗室作業にはそれなりの経験がある。もちろんイベント会場は、暗室よりは充分暗いだろうが、なあに、どんな暗闇だって、三十秒もすれば目が慣れて、ぼんやりと見えてくるものさ。

だが、都会の一隅に設えられたその暗闇では、三十秒どころか、一分、いや何分経っても一向に何も見えてこなかった。辺りには、私と同じように暗闇を体験しに来た数名の参加者がいるはずである。だが、そう広くない空間にいる、お互いの姿が見えない。いや、そもそも自分の姿すら見えない。手を広げて、自分の顔を覆うように翳しても、その手が見えない。「目と鼻の先」などというが、まさにその目と鼻の先が見えないのである。

ほんとうの暗闇。

友人が口にしたその言葉の意味が、やっと分かってきた。

怖い、という感情がにわか湧き上がってきた。

その時、会場にいたガイドの女性が、私たちの心を見透かしたように声を掛けてきた。

「みなさん、暗闇はどうですか？ 怖いですか？」

ちよつと怖い、という若い女性の声が、向こうのほうから聞こえた。

「そう、ちよつと怖いかも知れませんが。じゃあ、怖くないように、声を掛けあつていきましょう」

そういって、私たちは、お互いの名前を名乗るように言われた。ガイドの女性は、ミホさんと言った。

私たちは、ミホさんの指示で、名前の順に列になって暗闇の中を歩くことになった。名前を呼び合い、確かめ合って並ぶ。歩きながら列が崩れないよう、前の人の肩に手を掛ける。見ず知らずの人の肩に手を掛けるなど、外の世界なら相当な抵抗感があるところだ。だがここでは、誰もが昔からの友人のように名前を呼び合い、肩に手を掛けている。そしてまた、見ず知らずの誰かが、私の名を呼んで肩に手を掛けてくる。それは、決して嫌な感覚ではなかった。

一列になって進んでみると、会場内には様々な仕掛けが施されていた。

「ここ、段差あります。注意して」先頭の人が二番目の人に教える。「あ、ほんとだ」二番目の人はその段差を確かめながら、また次の人に伝える。そのように言葉がリレーされて

いく。暗闇の中で、私たちはお互いの身体と言葉を杖にして、助け合いながら歩いた。

やがて「広場」についた。私たちは、いちどばらばらになって、それぞれ手探りで見つけたものを報告するように言われた。

「……木が植えられています」

「干し草が積んである！ いい香り」

「水が流れています。これ、川？ 冷たくて気持ちいい！」

それぞれの発見が、それぞれの場所から、口々に報告される。「どこ？ どこ？」「こっち！ こっち！」と呼び合い、導きあって、それぞれの体験を共有する。

仕掛けと言っても、いずれも普段なら気にも留めない、ぱっと目で見てすませてしまいたいようなものばかりだ。だがこの空間では、誰かが気づくまで、その存在は「無」である。そして気づいた人がいても、その人が言葉にして伝えない限り、他の人にとってその存在は「無」のままである。だから、何でもないものの発見に誰もが夢中になり、それを精一杯伝え合おうとする。

気がつけば、暗闇は、無数の言葉と歓声が溢れる空間になっていた。そこで交わされる言葉は、温かかった。熱を持っているようだった。その熱が、暗闇を照らす光となっていた。飛び交う言葉が人から人へ伝わっていくのが見えるようだった。言葉が、いつしか、見知らぬ私たちをひとつに結び付けていた。

やがて暗闇体験も終了の時刻になった。私たちは、完全な光の空間に戻る前に、微かな灯りのついた小部屋で目を慣らすように言われた。

ガイドが小部屋に通じる扉を開けると、ぼんやりとした光が目射した。確かに、完全な暗闇に慣れた目には、これでも十分眩しい。薄明かりの中、丸く並べられた椅子に思い思いに座り、あらためてお互いの姿を見まわす。先ほどまで、言葉を頼りに一緒に暗闇を探検した仲間がどんな人だったのか、今度は目で確認し合っている。

だが、その視線のやり取りに、ひとりだけ入れない人がいる。
ガイドのミホさん。

いくら私たちが見つめても、彼女が視線を返すことは、ない。私たちが「いつもの」光の空間に帰ろうとしている時、彼女はまだ「いつもの」暗闇の中にいる。

そう、彼女は全盲の視覚障がい者である。

暗闇の会場は、彼女にとっては日常空間である。どこにどんな仕掛けがあるのかは熟知している。そこを訪れる私たち晴眼者を、言葉で励まし、言葉で導く。それが彼女の仕事であった。もちろん彼女の仕事は、単に数々の仕掛けや、光に満ちた出口に人々を導くだけではない。言葉の温かみ。人の温かみ。そして暗闇が持つ、不思議な温かみ。それらを参加者が自然に感じるよう、導いてくれたのだった。

やがて私たちは完全に明るい場所へ出た。ここでは逆に、私の方が、ミホさんをガイドしなければならぬ。私は最後に、握手をお願いした。

「今日は来てくださってありがとうございます」

そういつて彼女は、右手を宙に差し出した。その時私は、彼女がまだ暗闇の中に生きて

いることを思い出した。私も先ほどまでいた、あの温かい暗闇の中に。

私は彼女の手を取り、そして自分の目を閉じた。

「また来ます」そう言って、明るい暗闇の中で、ミホさんの手をぎゅっと握りしめた。

目は口ほどにものを言う、という。ならば、視覚障がい者のコミュニケーションは晴眼者よりも貧しいのだろうか。

情報の視覚化が進み、「見える化」が持て囃される中で、私たち晴眼者はますます視覚に頼ったコミュニケーションに傾倒しつつある。そしてひとたび視覚を取り上げられてしまうと、互いに言葉で結びあうこともできず、孤独な暗闇の中に、ただ立ち尽くしてしまふ。

私たちには「見えなく」なりつつある、何か大切なもの。それを、暗闇の中で見つめ続け、時にそつと私たちに教えてくれる「見えない」人々。

いつもの、光あふれる世界では気づくことのなかった言葉の温かみが、今もこの手に残っている。暗闇だからこそ見つけることができた、その微かな輝き。これからは、この明るい世界の中でも、その微かな輝きを感じられるようになりたい。

大丈夫。忘れかけたら、ただ目を閉じればいい。温かい暗闇はいつもそこにある。